

## 今関六也氏菌類画コレクションから明らかになった、 きのこ分類学者としての伊藤篤太郎

The Mr. Rokuya Imazaki's collection of fungal drawings reveals an aspect of  
Dr. Tokutaro Ito as a mushroom taxonomist.

折原 貴道 (ORIHARA Takamichi)

### はじめに—今関六也氏菌類画コレクションと伊藤篤太郎

伊藤篤太郎博士 (1865–1941) (以後、篤太郎と表記) は、日本で初めての理学博士として知られる本草・植物学者、伊藤圭介 (1803–1901) を祖父に持つ植物学者である。祖父、圭介に幼少の頃から植物学の英才教育を受けた彼は、日本人として初めて、植物分類学において新分類群 (新属) の記載を行った人物として知られるが、その詳細は本特集の他記事に委ねる。彼はまた、そのキャリアの晩年に、きのこの分類に関するいくつかの論文を発表しており、菌学者としての一面もあった。

篤太郎の菌類研究に対する強い関心と熱意は、彼の遺した多数のきのこ彩色画やスケッチから窺い知ることができる。篤太郎は1921年に東北帝国大学の講師に着任して以降、きのこの分類学的研究に本格的に取り組むこととなった。なお、現存する篤太郎の菌類画の一部は、篤太郎が東北帝国大学着任する際に、同大学の生物学科所属の絵師として彼が呼び寄せた画家、佐久間文吾によるものである (岩津, 2016)。意外なことに、篤太郎によるこれらの菌類画は、神奈川県立生命の星・地球博物館が所蔵する、今関六也氏菌類画コレクションの中に含まれていた。今関六也 (1904–1991; 以下、今関と表記) は多数のきのこ図鑑を執筆、監修したことでも知られる、昭和期を代表する菌学者の一人である。東京帝国大学を卒業後、文部省東京科学博物館 (現在の国立科学) の初代菌類キュレーターとして勤務し、その後、

1947年に農林省の林業試験場に移り、以前から継続していた木材腐朽菌の分類学的研究のほか、森林病害についての生態学的研究などでも業績を残した。今関と篤太郎との接点は、今関の東京科学博物館在職時代にあったと考えられる（大坪による既出記事を参照のこと）。その際に今関の手に渡った篤太郎の菌類画は、今世紀に入るまで、今関氏及びそのご遺族の手元に保管されていたのである。

### ついに正式に新種記載されることのなかった、幻の未記載種

篤太郎は1929年以降、植物学雑誌において、日本産のコウヤクタケ型のきのこ計51種の報告を複数回にわたって掲載しており、そのいくつかの種については、分類学的な所属の変更を加えている（Ito, 1929a, b, c, 1930a, b）。しかし、新種として学術雑誌上で正式に発表されたのは、後述するナメコ（*Collybia nameko* T. Ito として記載）1種のみである。ところが今回、今関が所蔵していた篤太郎の菌類画の中から、未発表の新種きのこ2種の記載草稿と思われる資料が見つかったのである。

一つ目は“*Leptonia sendaica* T. Ito”（和名：ルリタケ）と名づけられたきのこの新種記載の草稿である（図1）。これはきのこの彩色図と観察記録、そして記載文からなっており、記載文の表紙面には『*Leptonia sendaica* T. Itôニ関スル記録』と題されている。「ルリタケ」という和名のきのこは一般に知られていないが、これらの資料から判断される限りでは、この菌はソライロタケ *Entoloma virescens* (Sacc.) E. Horak か、それに類似する菌のようである。なお、本種の学名については、文法的には“*Leptonia sendaiensis*”などと綴るのがより適切であると思われる。

もう一つは、“*Tricholoma muscarium* T. Ito”（方言名：キンタケ）というきのこの新種記載の草稿である（図2）。本資料も上述の“*Leptonia sendaica*”の資料と同様、きのこ彩色画と論文草稿、観察記録およびスケッチの資料からなっている。現在、「キンタケ」という和名は使われていないが、東北地方を

中心に、キシメジ *Tricholoma equestre* (L.) P. Kumm. のことを「キンタケ」という地方名で呼ぶ地域がある。しかし、本資料の菌は、キシメジとは明らかに異なる。種形容語の“*muscarium*”とは「ハエを殺す」というような意味であり、彩色画の隅には「蠅ヲ殺スニ用イルト云フ 但シ人ニハ無毒」と書かれている。現在 *Tricholoma muscarium* という学名は「ハエトリシメジ」に充てられており、篤太郎による記載文を読む限りでは、傘の色は異なるものの、両者は同種である可能性がある。しかし、“*L. sendaica*”と同様に、篤太郎によるこの記載論文は、結局出版されることはなかった。そのため、命名規約上の有効出版には該当せず、本学名は無効である。篤太郎の観察記録によると、このきのこの採集日は1927年（昭和2年）10月7日である。一方、菌学者の川村清一博士により、ハエトリシメジが *T. muscarium* Kawamura として記載されたのは1954年であった（ただし、この時の記載はラテン語による記載を伴わない「裸名」であったため、命名規約上のルールを満たしておらず、1959年になって改めて命名規約上の有効発表がなされた（Hongo, 1959））。もし、篤太郎によるこの論文が出版されていれば、ハエトリシメジに対して、*T. muscarium* T. Ito という



図1. 未記載種“*Leptonia sendaica* T. Ito”（篤太郎による和名：ルリタケ）の論文草稿の原図（KPM-NCI 301）。図は彩色画で、傘は淡青色、柄も青色を帯びている。図の中央部には担子胞子が描かれている。1926年9月27日、仙台にて、土橋忠重氏採集。

学名が現在でも使われていたかもしれない。同種と思われるきのこに対して、篤太郎が数十年も先駆けて同じ学名を検討していながら、結局お蔵入りしてしまったというのは、皮肉な話である。

いずれの未記載種の論文草稿についても、類似種との形態的比較などが丁寧になされており、当時の一般的な記載論文の基準からすれば、最終的な推敲を経て、十分学術論文として通用するクオリティのものであろう。以上の経緯からは、新種の提案に対する、篤太郎の慎重さが窺われる。彼の心中は察するより他ないが、いわゆる「破門草事件」による、過去の苦い経験が尾を引いていたのかもしれない(岩津, 2016)。

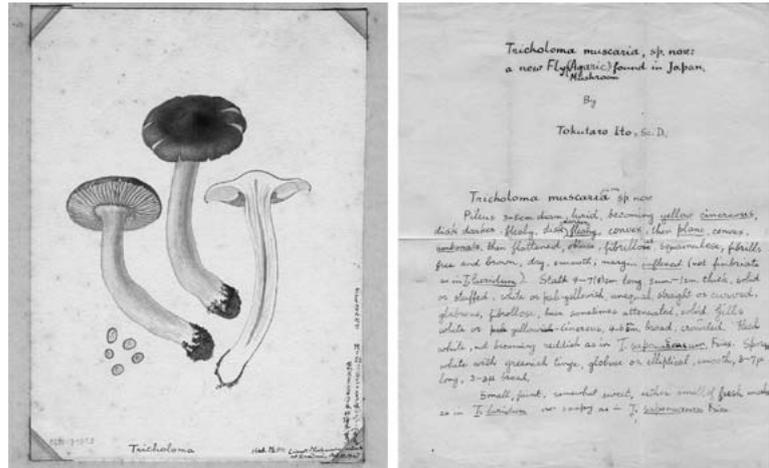


図2. 未記載種“*Tricholoma muscarium* T. Ito” (方言名: キンタケ) の彩色画(左)と記載論文草稿(KPM-NCI 465). 傘の色は黄色味を帯びた灰褐色. 1927年10月7日, 仙台にて採集.

### 篤太郎によるナメコ (*Collybia nameko* T. Ito) の新種記載とその後の分類学的混乱

篤太郎の菌類学における最も重要な貢献は、日本で古くから食用にされてきた、ナメコの特徴を整理し、新種として記載したことである。篤太郎は晩年、東北帝国大学在職時から3年以上におよぶ慎重な分類学的検討の末、各地でエノキタケなどの類似した種と混同されていた「なめこ」を新種であると結論し、1929年、*Collybia nameko* T. Ito という学名を与えた (Ito, 1929d)。当時は一般に、傘が褐色でぬめりがある複数種の食用きのこを「なめこ」を称していたようで、必ずしも現代の「ナメコ」と同一の菌を指す言葉ではなかったようである (今井, 1933; 川村, 1954)。特に、エノキタケ (当時使われていた学名では *Collybia velutipes* (Curtis) P. Kumm., 現在では *Flammulina* 属に移されている) を「なめこ」と称して食用にする地域は多かった。しかし、この論文中で篤太郎は、*Collybia nameko* と *C. velutipes* (エノキタケ) の形態的・生態的差異を明示しており、論文中の図版からも、篤太郎がナメコとエノキタケを分類学的に区別する意図をもって論文を執筆したことが読み取れる (図3)。

篤太郎がナメコを帰属させた *Collybia* 属には現在「ヤグラタケモドキ属」という和名が与えられており、当時の属概念は現在のものとは大きく異なっている。ナメコ *Collybia nameko* についても、分類学的な再検討の結果、1933年に *Pholiota* (モエギタケ属) に移され、それ以降



図3. Ito (1929) の図解に用いられたナメコの細密画 (KPM-NCI 352). ナメコの学名 *Pholiota nameko* (T. Ito) S. Ito & S. Imai (= *Collybia nameko* T. Ito) のレクトタイプに指定されている論文原図.

は *Pholiota nameko* (T. Ito) S. Ito & S. Imai の学名が広く用いられるようになった (今井, 1933)。

しかしその後、菌類分類学者である川村清一博士 (1881–1946) は、彼のきのご研究の集大成ともいえる原色日本菌類図鑑 (1954年、川村の死後に出版された) に収録された解説文において、ナメコに対する篤太郎の分類学的扱いに異を唱えている。川村 (1954) は、東北地方 (福島県、山形県) で古くから食用にされてきた通称「なめこ」は、実はエノキタケのことであり、ブナに発生する現在のナメコは、20世紀以降に人工栽培されるようになってから普及したものに過ぎない、と述べた。そして、Ito (1929d) のナメコ (*Collybia nameko*) は、実際にはエノキタケを誤って記載したものであると考えた。川村 (1954) によれば、東北帝国大学に保存されている、篤太郎記載の *C. nameko* のタイプ標本 (学名の基準となる、唯一の標本。通常はホロタイプ [正基準標本] を指す。) を観察した結果、それはやはりエノキタケであったという。これらを根拠にして、川村 (1954) は複数の類似した食用菌に充てられてきた「なめこ」という名を特定の種の和名として用いるのは混乱のもとと考え、ブナに発生する現在のナメコに「ナメスギタケ」という新称を付け、その学名を新種 *Pholiota glutinosa* Kawam. とした。しかし、幸か不幸か、*P. glutinosa* の記載にはラテン語による記載文が付けられておらず、国際藻類・菌類・植物命名規約 (以下、命名規約) に違反した学名となり、この川村 (1954) による学名の提案は無効となった。

はたして、篤太郎命名の *Collybia nameko* (ナメコ) に対する、川村の結論は正しかったのか、真相は突き止める由もないが、当時、自他共に認める、日本を代表する菌類分類学者であった川村にとっては、菌類学の世界では別段目立った業績を残していない、いわば新参者であった篤太郎が、日本の伝統的な食用菌であるナメコの新種記載を行ったということに対し、多少なりとも穏やかならざる感情があったのではあるまいか。川村 (1954) における、篤太郎命名の *C. nameko* について言及した一節には、篤太郎の菌学的知識や経験に対する、ある種の偏見が感じ取れる。また、Ito (1929d) では、ホロタイプを含め、標本に関する言及は一切無く (当時は命名規約上、それでも有効発表とされた)、川村 (1954) が再検討したという「タイプ標本」が、本当に篤太郎がナメコの記載に用いた標本そのものであったかどうか不明である。

前述の「ルリタケ」や「キンタケ」の事例からも分かる通り、篤太郎は新種の提案には極めて慎重であった。Ito (1929d) では、エノキタケとナメコと識別点を明示しているうえ、今関六也氏菌類画コレクションに含まれる篤太郎の菌類画の中には1929年のナメコの新種発表以前に描かれた、エノキタケとナメコそれぞれの画が存在していた (図4-5; エノキタケは佐



図4. 篤太郎の菌類画コレクションに含まれるエノキタケ彩色画 (佐久間文吾氏描画; KPM-NCI 107). 1926年11月6日採集。



図5. 篤太郎による描画と考えられるナメコ彩色画 (KPM-NCI 357). 1924年11月12日採集。

久間文吾による描画)。これらの点から、川村(1954)の見解に反して、篤太郎が、エノキタケと異なる種として、ナメコ *C. nameko* を新種記載したことは明白である。結果的には、ナメコに対し、篤太郎命名の *C. nameko* を基とする、*Pholiota nameko* の学名がその後長らく用いられることとなった。

### ナメコの学名見直しと篤太郎論文のナメコ原画

20世紀に入って、再びナメコの学名に注目が集まることとなった。森林総合研究所の根田仁博士は、篤太郎が記載した *C. nameko* のタイプ標本は紛失してしまっているとして、命名規約に従い、新種記載の論文に掲載された図3を *C. nameko* の学名のタイプ(レクトタイプ)に指定した(Neda, 2008)。命名規約では、原発表の際にホロタイプが指定されなかった場合、あるいはホロタイプが所在不明の場合や、ホロタイプが複数の分類群に属していることが判明した場合に、原資料から選定された1個の標本または図解がレクトタイプとして指定されるとある(第9条 9.2)。先述のように、Ito (1929d) は *C. nameko* のタイプ標本をそもそも指定していないため、「紛失した」というのは適切ではない。いずれにせよ、Neda (2008) による分類学的措置は、タイプ標本が指定されていない学名に対し、原資料中の図解をタイプに指定するという、近年では珍しい事例となった。そして、この研究は今関六也氏菌類画コレクションの資料的価値が再注目されるきっかけにもなった。

Neda (2008) はさらに、今井(1933)において言及されていた、1850年にネパール産から報告された *Pholiota microspora* とナメコの類似性に着目し、前者のタイプ標本と日本産ナメコ標本の形態的比較をおこなった。その結果、両者は同一種と判断され、命名規約に従い、篤太郎の *Collybia nameko* より以前に命名されていた、*P. microspora* をナメコの正名とする提案がなされた。以上の経緯は、岩津(2016)にも詳述されているので、参照されたい。

### まだ解決していないナメコの学名問題

Neda (2008) による検討により、ナメコの学名問題は一応の解決をみたものの、まだ再検討の余地が残されている。Neda (2008) により同種と結論付けられたネパール産 *P. microspora* と日本産ナメコの、DNA 情報を用いた比較検討は未報告である。両者の隔離分布の状況を考慮すると、たとえ形態的に明確な差異が確認されなくても、少なからず遺伝的分化が生じている可能性もある。さらに近年、ヒマラヤ産の標本を基に、*Pholiota microspora* var. *hymalensis* という亜種が記載された(Adhikari et al. 2014)。この亜種も含めた、両国産のナメコの詳細な系統分類学的検討が今後必要であろう。その結果によっては、別種または亜種として、*Pholiota nameko* (T. Ito) S. Ito & S. Imai の学名が再び日本産ナメコの正名となる日が来るかもしれない。

### 謝辞

本調査の基盤となった、故今関六也氏の菌類画コレクションを含む貴重な遺品の数々をご寄贈いただいた、ご子息の故今関士郎氏をはじめご遺族の方々に心よりお礼申し上げます。出川洋介博士には、同コレクション寄贈の受け入れおよび資料情報の整理を始めるにあたり、多大なご尽力をいただいた。また、同コレクションの電子データ化および資料情報集計に取り組んでいただいた大坪奏氏ならびに生命の星・地球博物館菌類ボランティアの皆様へ感謝申し上げます。本稿をまとめるにあたって、野崎ますみ氏および岩津都希雄博士には伊藤篤太郎氏に関する貴重な情報をいただいた。改めてお礼申し上げます。

### 引用文献

Adhikari, M. K., Watanabe K., and Parajuli, G. P. (2014) A new variety of *Pholiota microspora* (Berk.) Sacc.

- (Agaricales) from Nepal. *Biodiversitas*, 15: 101–103.
- Hongo, T. (1959) The Agaricales of Japan I-(1) (日本産マツタケ目菌類 第一部 総論(その一)). 滋賀大学紀要, 9: 47–94.
- 今井三子 (1933) 食用菌なめこニ就キテ. 植物學雜誌, 47: 384–389.
- Ito, T. (1929a) *Symbolae ad mycologiam Japonicam*. I. *Aleurodiscus*. 植物學雜誌, 43: 460–466.
- Ito, T. (1929b) *Symbolae ad mycologiam Japonicam*. II. *Peniophora*. 植物學雜誌, 43: 515–524.
- Ito, T. (1929c) *Symbolae ad mycologiam Japonicam*. III. *Corticium*, *Gloerocystidium* et *Asterostoma*. 植物學雜誌, 43: 633–643.
- Ito, T. (1929d) *Collybia nameko*, sp. nov.: a new edible fungus of Japan. *Proceedings of the Imperial Academy*, 5: 145–147.
- Ito, T. (1930a) *Symbolae ad mycologiam Japonicam*. IV. *Asterostromella* et *Hymenochaete*. 植物學雜誌, 44: 89–93
- Ito, T. (1930b) *Symbolae ad mycologiam Japonicam*. V. *Hymenochaete*. 植物學雜誌, 44: 151–157.
- 岩津都希雄 (2016) 伊藤篤太郎—初めて植物に学名を与えた日本人—〈改訂増補版〉. 八坂書房, 東京, 349p.
- 川村清一 (1954) 原色日本菌類図鑑 第5巻. 風間書房, 東京, pp. 538–540.
- Neda, H. (2008) Correct name for “nameko”. *Mycoscience*, 49: 88–91.
- 物標本の収集と保管—その歴史と意義 Collecting and preserving botanical specimens